

第17回関西建築家大賞 審査講評

審査建築家 村上 徹

第17回関西建築家大賞受賞者 岸下 真理 氏

今回、日本建築家協会近畿支部の「関西建築家大賞」に対して11人の応募があり、其々が2作品、合計22点を4月末までに広島市内にある私のアトリエで審査。その結果、3名の6作品を実際に見ることに決定。そして、5月9日に大阪、10日に京都と二日間で現地を訪問した。両日共に晴天に恵まれた。

審査対象作品 日本圧着端子製造株式会社

大阪商業の中心地である淀屋橋のほど近く、道修町の角地に建てられたグローバル企業の本社屋。外装全面に木格子を採用したマッシブな形態は圧巻であり、地区のランドマークとなっている。ここでの木格子は竣工から約10年の経年で、全体的には黒色に変化し、多少の色斑がある事でより素材感を表出し竣工時の写真よりも美しいと感じられた。全体は、各階を4分割し、隣り合う床を半階ずらすことでの二重螺旋の構成。アルコーブをともなった小規模な各執務空間は流動的であり各方向からの自然光が入る。アルミサッシュには単純な引き違いを採用し中間期には容易に風を通すことが出来る。ここでの細い鉄骨柱列と外部の木格子に挟まれたアルミ建具、その方立は目立たない。見事な外皮の提案である。内装や家具を木質化した内部は住空間の様相とも受け取れる。意欲的な秀作である。

審査対象作品 日本圧着端子製造 大阪技術センター別館

大阪と兵庫の府県境、工場や倉庫、住宅が混在している地域に建てられた研究試験施設。応募書類だけでは利用のされ方や空間性はよく分からなかったが、現地を訪れてその疑問は一掃した。大半に自動計測試験機器が配され、ここで採用の八角形状は、機器とそのメンテナンススペースで1ユニット、その連続形が全体となっている。内壁と天井には騒音対策等のために繊細なデザインの木製格子パネルで仕上げられ、本来は無機質となりがちな室内は暖かさが感じられる。トンガリ屋根のある外観も嬉しい。近隣とも馴染んでいる。水害対策としての高床式の採用、外壁面の分節がヒューマンスケール効果を生んでいる。現在、ここでは同様の形状で第2期工事が進行中、今回は一部分を2階建にして休憩室に利用し、全面を走るJR線と対峙させる事になるらしい。竣工が楽しみである。

岸下真理氏は、創造性により建築家の力と建築の魅力を実作により社会に示してくれた。意欲的で丁寧な活動を通して地域に根ざし、今後の大いなる活躍が十分に期待できる建築家である。また、レベルの高い信頼を得て、次々に仕事を依頼され続けていることは、関西建築家大賞の受賞者に相応しいと考える。現地審査に同行された有志の方に感謝したい。